

## 新興格闘技ビジネスに関する研究

トップスポーツマネジメントコース  
5007A340-1 山口雄人

研究指導教員： 平田竹男教授

本稿では、打撃系格闘技「K-1」と総合格闘技「PRIDE」を新しい格闘スポーツ、いわゆる「新興格闘技」と定義付け、ここ数年で人気低迷傾向にある新興格闘技ビジネスに関する研究をした。

第1章では、研究の背景、既存研究、研究目的について述べた。この十数年人気を獲得・維持してきた打撃系格闘技「K-1」がここ数年で人気を縮小させており、また総合格闘技「PRIDE」が2007年に買収・消滅した事もあり、格闘技エンターテインメント産業はこの先数年も更に人気停滞していく事が予想される。このような問題意識に基づき、「K-1」や「PRIDE」などの新興格闘技に至るまでの歴史や変遷、近年の産業規模を明らかにし、未来を考察することを本研究の目的とした。

第2章1項では、格闘技がライブ・エンターテインメント産業においてどのような位置づけにあり、どのようなジャンルから構成されているのかを定義付けた。続いて2項では、分析対象と分析方法を述べた。本稿では、まず新興格闘技に至るまでにどのような歴史や変遷を経てきたのかを史実を基に整理、分析することとした。次に、近年の格闘技ビジネスにおいてどのジャンルが生活者に親しまれてきたのかを各ジャンルの試合数、観客動員数、チケット売上市場規模の数値を基に分析することとした。更に、自身が携わってきたフジテレビ・スポーツ局格闘技班の業務が新興格闘技の発展にどのように貢献してきたかを分析することにした。

第3章では結果として、新興格闘技が成り立つまでの格闘技エンターテインメントの歴史や変遷を史実を基に整理した。打撃系格闘技の「K-1」に至るまでの変遷は、「ボクシング」⇒「キックボクシング」⇒「極真空手」⇒「正道空手」⇒「K-1」となっている事が分かった。また総合格闘技「PRIDE」に至るまでの格闘技ジャンルの本流は、「新日本プロレス」⇒「UWF」系プロレス⇒「PRIDE」となっていることが分かった。また「プロレス」と「実戦格闘技」ジャンルは、歴史的に組織の分裂を幾度となく繰り返し、近年では「多品種少量化」傾向にあることが分かった。

第4章では、「大相撲」、「ボクシング」、「プロレス」、「実戦格闘技」という4ジャンルの格闘技が近年生活者にどのように観られてきたのかを大会数、観客動員数、チケット売上の市場規模の数値を基に分析した。近年においては4ジャンル中「実戦格

闘技」が唯一成長しているジャンルであり、更にもっとも順調な伸びを示していたのは「K-1」を運営する「FEG」という企業、特筆すべき伸びを示していたのは「PRIDE」を運営してきた「DSE」という企業であることが明らかになった。また「実戦格闘技」ジャンルにおいては、近年極端な二極化が進んでいることも明らかになった。

第5章では、「K-1」や「PRIDE」をはじめとした格闘技中継や格闘技番組の制作業務を通して、フジテレビ・スポーツ局格闘技班が新興格闘技の普及やスポーツソフトとしての人気向上にどのように貢献してきたかを分析した。フジテレビ・スポーツ局格闘技班は、「格闘技の普及と、スポーツソフトとしての価値向上」を目指し、長年に渡って日々の制作業務を遂行したことで、1990年代から「K-1」をはじめとした格闘技全体のイメージを変えた。近年においては「テレビで見たいスポーツ番組」、「会場に観戦に行ってみたいスポーツ」のアンケート調査で上位に入るスポーツソフトとして人気を得るまでになった。

第6章では、それまでの結果を踏まえた上で、近年人気低迷傾向にある打撃系格闘技イベント「K-1」と、「PRIDE」がなくなったことで市場が空洞化傾向にある総合格闘技のこれからのあり方を考察した。日本国内の「打撃系格闘技」、「総合格闘技」を、それぞれ一極集中化することで価値を最大化する可能性について検討し、2008年以降の新興格闘技の方向性において重要な事は「選択と集中」であると結論付けた。どのような目的で、誰が、どの組織が、どのような役割を、どのように果たしていくのかを選択し、それを実現するためにノウハウや人材や情熱や資金を集中して投下し、これからの格闘技を盛り上げていく必要がある。「K-1」という打撃系格闘技は「FEG」が専門に継続し、その価値を最大限まで高める。「K-1 WORLD GRANDPRIX」は世界中で放映されており、国内だけに留まらずグローバルな視点をもって運営されていくべきである。欧米やアジアなど世界各地に運営本部・コミッションを創設し、各国でアマ・プロ大会を開催し、継続的に次世代のK-1ファイターを育成し、更には「K-1」というスポーツを世界的に普及していく事を優先課題とすべきである。「FEG」はそこに選択と集中をし、長年かけてブランド化した打撃系格闘技「K-1」を更に磨き上げ価値を向

上、最大化させる必要がある。

また総合格闘技においても「FEG」を中心にして共闘して盛り上げて行く必要がある。「FEG」が展開している「HERO'S」には総合格闘技で現在唯一地上波放送が付いている。そこに焦点を当て日本の総合格闘技は選択と集中を施すべきである。ここ数年ファンが望んでいる事は「HERO'S」と旧「PRIDE」の選手のレベルの高い試合の実現であり、大切なのは中長期的且つ継続的にそれを行う事である。継続的に日本の総合格闘技を盛り上げ世界と勝負をする目的で、「FEG」と元「DSE」スタッフ

が提携し、マッチメイクやイベント演出、映像演出を元「DSE」スタッフが中心となり継続的に果たしていくという選択が望ましい。そうすることで、多くの総合格闘技ファンのニーズ応える事が出来るのではないだろうか。そこにノウハウや人材や情熱や資金を集中して投下し、これからの格闘技エンターテインメントを盛り上げていく必要がある。比較的歴史が浅い新興格闘技業界全体で共闘し、選択と集中をもって同じビジョンを描き、格闘技を磨き上げ、同時に情熱や愛情をもって盛り上げていく事が望ましい。本稿では、そのように結論付けた。